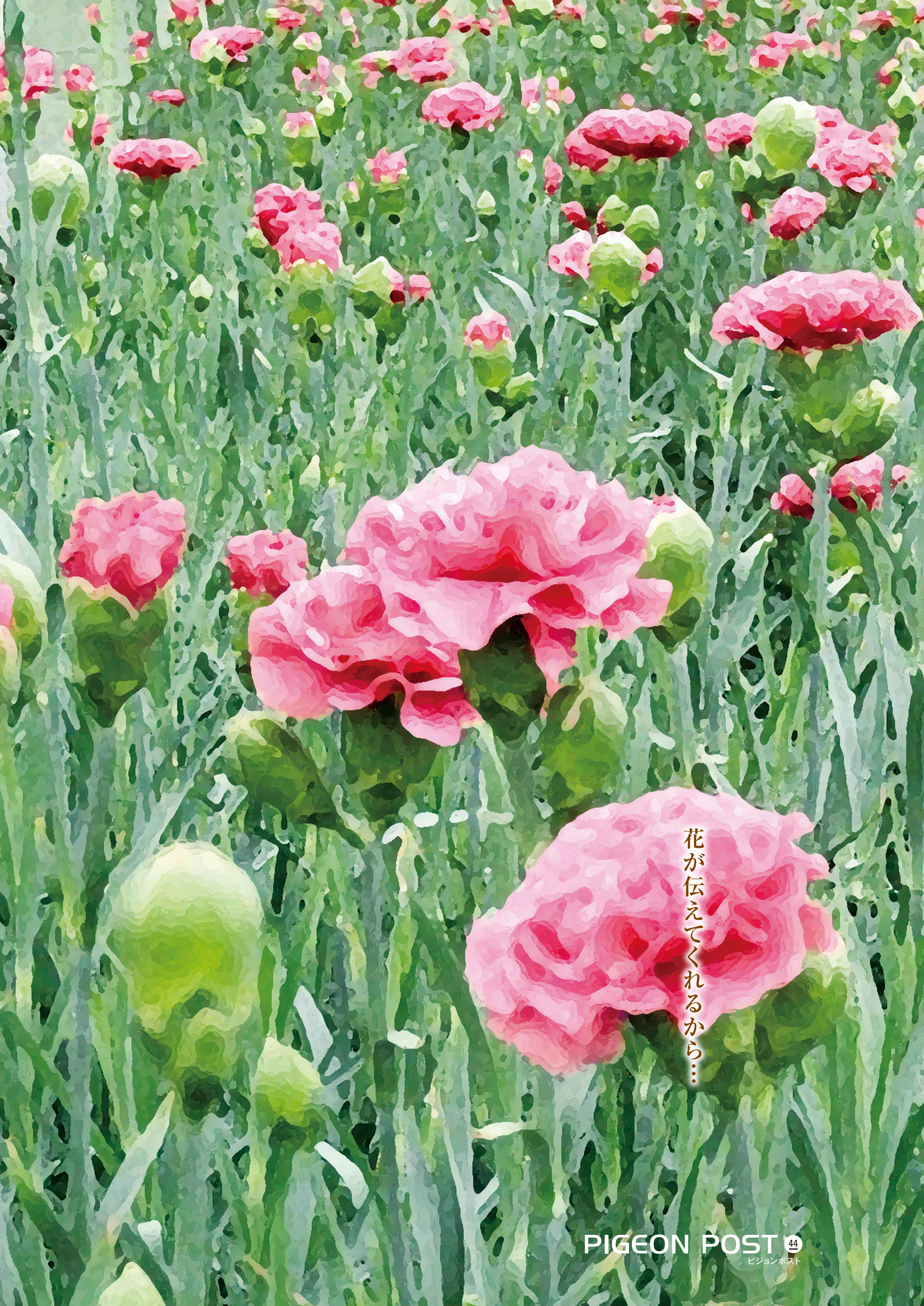

花が伝えてくれるから…

①スタンダードカーネーションの一番花が開花し始めた温室内。1株から平均8本収穫する　②出荷準備が整ったカーネーション。出荷は主に6月～翌2月
③試験栽培中の温室。何十種類もの栽培を繰り返し、生産性、市場性を見極めていく　④鮎沢農園・グリーンバレーファーム代表の鮎沢正浩さん

情熱と科学の花づくり

鮎沢農園「日本品質」に賭ける花栽培

風薫る5月。母の日に贈る花、カーネーションに注目が集まる季節です。

信州はカーネーションの作付面積、出荷量とも日本一。年間5240万本を出荷（平成28年度・全国の20・8％）しています。代表的な産地の一つが諏訪湖周辺。夏も冷涼な高原性の季候を生かし、1950年代後半から生産を伸ばしてきたエリアです。ここに、花卉の卸業者や全国の花専門店など切り花に携わるプロたちをして「花の色も、持ちも、格が違う」と言わしめるカーネーションづくりの名人がいます。岡谷市の鮎沢農園代表、鮎沢正浩さんです。

鮎沢さんは、この地にカーネーション栽培が根ざしたのと同じころ誕生し、カーネーションとともに育ちました。父は、農家の合間仕事として始まった栽培に科学理論と先進技術をプラスして本格的な地場産業に育て上げたパイオニア。その思いを受け継ぎ、新しい微生物研究の成果や環境研究への知見をそそぎ、国内屈指の品質をもつカーネーションを出荷し続けています。

切り花の品質を決めるのは、均整のとれた花の姿や色の鮮やかさはもちろん、鮮度の高さ、日持ちのよさ、色持ちのよさなど。加えて「風情」が重要と、鮎沢さんは考えます。現在、日本で流通するカーネーションの70％以上がコロンビアなどからの輸入品。大輪で見た目のインパクトが強く、しかも安価に大量に入ってくる海外産との競争に対抗するには、従来の品質＋αの魅力づくりが欠かせません。鮎沢さんは世界で最も厳しいといわれる日本の消費者の目にかなう「日本品質」の花を追求することに生産者としての使命と意義を感じ、新たな取り組みに挑み続けています。

農場では「花が喜ぶ環境」づくりに徹しています。4月、今年の栽培が始まったハウスにお邪魔すると、一瞬にして深呼吸したくなる心地よさに包まれました。気温18℃、湿度50％前後。春風にあおられて花粉や砂ぼこりが舞う屋外とはうってかわり、空気が澄んでいるのを実感できます。「カーネーションは人が心地いいと感じるのと同じ環境を好む」と、鮎沢さん。高温の蒸気で洗浄消毒し、微生物と有機肥料を加えて命を培う力を蓄えた土から伸びている茎や葉からは、彩りにも姿にも力強さを感じます。土や水のミネラル分が有機的に作用するのに適したph6程度（弱酸性）の土壌は驚くほどフカフカに耕され、その中で根も元気に伸びている様子を想像させました。

品種ごとに異なる生長過程を日々こまめに観察し、自分では動けない花の声に耳を傾け、その都度さまざまな要求に応えながら開花まで見守るのは容易なことではありません。「どれほど力を尽くしても100％満足と言える年はめったにない」のだとか。けれど、最初のつぼみがポッと色づきを見せた時に感じる喜びが、花づくりへの情熱を後押します。

「繊細な表情をもち、見る人の心を揺らすような花をつくりたい」と目を輝かせる鮎沢さん。日々の生活の中で一輪の花がもたらす小さな幸せ。うれしいとき、悲しいとき、花は私たちの心に寄り添い、想いを届けてくれます。もうすぐ母の日。今年はどんなカーネーションを贈りますか。

花が喜ぶ環境で

鮎沢農園と、鮎沢さんが仲間と共同で運営するグリーンバレーファームが広がる岡谷市の出早地区は、標高８５０ｍ前後。諏訪湖を見渡す高台の斜面に広がり、カーネーションの原産地、地中海沿岸と地勢的な共通点があります。

生長に適した環境を安定して保てる温室で１００％栽培し、多品種小量生産で花卉市場や全国の花店、アーティスト等のニーズに応えています。出荷は主に６月から翌年２月。

湧水で栽培

ファームは岡谷市民の水源でもある横河川の上流域に位置しています。さらに上流は林野庁の「水源の森百選」に選ばれた森林。ファームのすぐ近くに横河川と源流を同じくする湧き水が出ています。水質がよく、真夏でも15℃を越えることのないこの湧水を栽培に用います。

土の中は宇宙

「土壌はブラックボックス」と話す鮎沢さん。１００グラムの土の中には5千億とも1兆ともいわれる微生物が存在し、それぞれに有益に作用し合ってバランスを保つことがわかっています。しかも微生物の数が多く多様であるほど、そこで育てる作物が病気になりにくいのです。科学的な知見と自然の神秘を融合させた土づくりが、名人の花づくりの基本です。

オペラ

ガナッシュ

ダークテンポ

テンポ

バナナ

ベルナール

マニクール

ミシェル

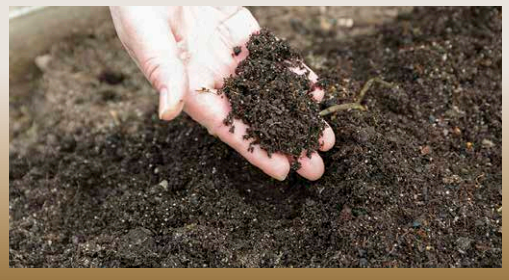
鮎沢農園の土づくり

phは6.0～6.2

土壌のphは原産地よりやや低めの弱酸性。ミネラル分が作用しやすく、代謝力が高い土壌が形成される絶妙なphに調整しています。それにより殺菌剤を一切用いずに病害虫に強い健康なカーネーションを育てることが可能に。
土を繰り返し使いながら新たな微生物や肥料を足してよりよい土にしていく、いわば「老舗鰻屋のタレ方式」。

健康で活力に満ちた土

十分に耕し、空気を含んでフワフワになった培地で栽培。生育状況を観察する過程で、土の健康状態やバランスもチェック。生長の度合いに応じて液肥を施肥。



土壌洗浄
120℃の蒸気で徹底的に洗浄、殺菌。毎年、定植前に実施。

▶

微生物投入
前から住む微生物に新たな微生物を加え、神秘の相互作用を活用。

▶

肥料投入
原肥はヤシガラなどの有機肥料。

洗浄

新品種、新花種への挑戦

消費者の嗜好がめまぐるしく変化する花の市場。鮎沢さんはカーネーションの品種を増やすだけでなく、栽培する花の種類を増やしたり、まだ誰も取り組んでいない花の栽培に挑戦するなど、独自の展開を模索しています。これまでアジサイ、ガーベラ、日本で生まれた新花ラックスなどに挑戦。カーネーションとは時期がずれる花の栽培によって通年出荷を目指すとともに、多くの人を魅了する新たな花を探求し続けています。

生産者が教える、元気なカーネーションの見分け方

母の日間近。いいカーネーションを選ぶポイントを、生産者の視点からアドバイスしていただきました。
花の色合いや咲き具合も大切ですが、健康は主に葉に表れるようです。

●全体の姿を見て清潔そうなもの

●葉の表面が「ワックス」と呼ばれる白い粉状のものに覆われているもの。（ワックスは健康のバロメーターとされ、虫も寄りづらい）

●葉が厚めで力強さにあふれているもの。葉が巻く種類のものは、巻きがしっかりしているものが丈夫。

●茎の下の方についている葉に汚れや枯れがなくきれいであること。（枯れているものは肥料を与えすぎているケースが多い）

清潔・安心・安全

「食卓にも安心して置ける花」づくりが鮎沢さんのモットー。衛生的な温室に加え、農薬等の散布を必要としない土壌や水によって確立した生産環境で、清潔で美しく、安心・安全と胸を張れる花の出荷を実現しています。

種苗メーカーの品種改良試験に協力

種苗メーカーの開発、改良を試験栽培によってサポートする業務も行っています。品種改良された新品種、新商品がどのような環境で栽培できるか、生産性はどうかなどを実際に栽培してフィードバック。結果が出るまで何年もかかる気の長い仕事ですが、生産者としての技術や感性を発揮するまたとない機会として、積極的に取り組んでいます。

提案型マーケティング

栽培する花は、ほとんどが大手花卉市場へ出荷されますが、一部は地元の花店や、こだわりを持つ全国の花店に出荷。品種が多いことを武器に、色や種類を組み合わせたセットも提案。注文に応じるだけの受け身ではなく、新たなニーズの喚起にも努めています。

人の目と手による丹精

鮎沢さんはスタッフとともに数十アールにのぼる温室を毎日見回り、その日の気象の状態、生育の状況、土の状態に目を配り、必要に応じたこまめな手入れを施します。
メリハリをつけた水やりも、その一環。約1ヶ月に一度、100ℓ／坪におよぶ大量の水を与えることで土壌をリセット。その後は様子を見ながら水やりを加減することで生育のばらつきを均一化しています。
また、「修正ピンチ（一番花の芽を摘み取り二番花の開花時期を調整する摘芯）」も、目配りと熟練を要する丹念な手作業です。
こうした丹精により、安価な大量生産品とは異なる品質を保持しています。

取材協力・写真提供
鮎沢農園・グリーンバレーファーム
〒394-0089 長野県岡谷市長地出早2-11-7
TEL0266-28-7765

MIYAMA INFORMATION

ご存知ですか排出者責任
廃棄物の定期分析はリスクマネジメントの第一歩です。

夾雑物や不明物の多い廃棄物分析には高い技術とノウハウが必要です。ミヤマでは約100名のスタッフが５つの拠点で「環境」に特化した分析業務に従事し、研究機関や開発部門等の先端技術の領域でもサービスを提供、ノウハウやデータを蓄積してきました。
不明物の定性判断や概算での含有量などは最短１日で分析が可能であり、分析結果にもとづいた廃棄物削減やリサイクル提案も行っています。また、製品不良や臭気発生などの生産工程で発生する課題に対し、解決策をご提案する原因究明分析サービスも行っています。

産業廃棄物の処理を委託する際には、「委託基準」の遵守が義務付けられており、廃棄物の正確な性状把握は事故の防止とともに、委託基準の遵守に不可欠な要素です。
廃棄物の組成や性状は、生産工程の変更にともない変化することから、廃棄物を定期的に分析し変化を常に把握しておくことが必要となります。

走査型電子顕微鏡（SEM-EDX）

ＩＣＰ発光分析装置

フレームレス原子吸光光度計

ガスクロマトグラフ二重収束型質量分析計

産業廃棄物処理時の「委託基準」

- 委託業者が許可を受けていることを確認する
（令第6条の2第1号、第2号）
- 委託する廃棄物の運搬・処分が委託業者の事業の範囲に含まれていることを確認する
（令第6条の2第1号、第2号）
- 委託契約を書面で行う
（令第6条の2第4号）
- 特別管理産業廃棄物の処理を委託する際は、廃棄物の種類、数量、性状、荷姿、取り扱い上の注意事項を文書で通知する
（令第6条の6第1号、規則第8条の16第1号、第2号）
- 契約書及び契約書に添付された書類を契約終了日から５年間保存する
（令第6条の2第5号、規則第8条の4の3）
- 収集運搬、中間処理または最終処分の委託は、許可を持つ業者とそれぞれ２者間で契約する
（法第12条第5項）

※法：廃棄物の処理及び清掃に関する法律
令：廃棄物の処理及び清掃に関する法律施行令
規則：廃棄物の処理及び清掃に関する法律施行規則

平成32年4月1日より
電子マニフェストの一部義務化がスタートします。

改正「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」が平成30年4月1日に施行され、マニフェスト制度の改正が行われました。当該年度の前々年度の特別管理産業廃棄物（PCB廃棄物を除く）の発生量が50t以上の事業場を設置する事業者が、当該事業場から発生する特別管理産業廃棄物（PCB廃棄物を除く）の処理を委託する場合には、電子マニフェストの使用が義務付けられます。※1
本年度（平成30年4月1日から平成31年3月31日）に上記に該当した事業者は、平成32年4月1日から電子マニフェストの義務化がスタートします（紙マニフェストは使用できません）。※2

※1　電子マニフェストの義務化は、各年度ごとの排出量で決定されます。
※2　当該事業場から排出される特別管理産業廃棄物のみ電子マニフェストが義務化されます。

ECTM ECOTECH MIYAMA
総合環境企業
ミヤマ株式会社
本社／〒381-2283 長野県長野市稲里一丁目5番地3　TEL.026-285-4166（代）　FAX.026-283-0011
■リサイクルセンター／東京・燕・秋田・名古屋・大阪　■工場／中野・上越・分水・燕・大町
■EM開発センター　■長野テクノセンター　■保全機材センター
■名古屋プラントサービスセンター　■東北プラントサービスセンター
■営業所／岩手・秋田・仙台・郡山・宇都宮・水戸・新潟・燕・上越・長野・上田・松本・諏訪
甲府・前橋・埼玉・千葉・横浜・静岡・富山・豊田・小牧・名古屋・京都・大阪
詳しくは当社ホームページへ　http://www.miyama.net/　ミヤマ　検索

PIGEON POST vol.44
発行日：平成30年5月　発行人：南 克明　企画：ミヤマ株式会社 広報室　制作：デザインワンエイト